

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

きくちとうよう
菊地東陽(1883-1939)は、日本への伝来直後から四代にわたり写真に携わる家系に生まれました。山形で東北最初の写真館を開業した祖父の新學は、同県令の命を受けて道路や建築物の記録写真を撮影し、御用写真師として天皇に献上するための写真帖を作成するなどの功績がありました。また、初期の写真雑誌である『写真新報』(朝陽社)には、売捌所として新學の名前が記されています。

東陽は、1898年に東京・銀座にあった二見朝隈の写真館を最初に、全国各地で修業を重ねました。山形で写真館を開業したのち再び東京へ行き、鹿島清兵衛所有の写真館が人手に渡った際に経営を任されています。1904年に渡米してシアトルから各地を転じ、1906年にニューヨークへ移りました。やがて顧客の自宅へ出張して撮影する「ホームポートレート」を創案して、政財界などの上流階級を中心に好評を博し、遂には中心地の5番街に「キクチスタジオ」を設けました。



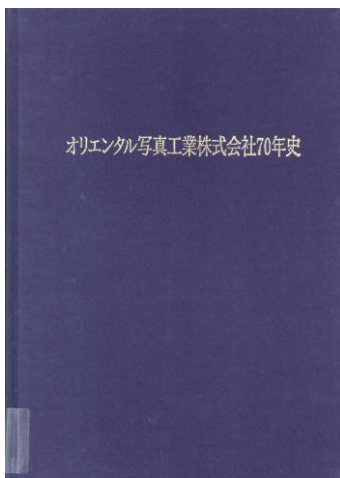
『欧米写真工業界の概況』
(氏名表記が「菊池」となっています)

このころ、日本国内で使われる感光材料が全て外国製品であることを知り、日本に写真工業を興すことを志しました。本業の傍ら研究を重ねた結果、1918年に感光性乳剤の製造法を確立します。翌年帰国し、渋沢栄一らの支援を受けてオリエンタル写真工業を設立しました。1921年には肖像用印画紙「オリエント」を発売しましたが、舶来崇拜の当時は国産品への信頼が無く、全く売れませんでした。しかし菊地は、自らの肖像写真採光法を含めた技術講習会を通して地道な宣伝販売を重ねました。

転機となったのが、1923年に発生した関東大震災でした。市中の印画紙が焼失したことで工場に残っていた在庫に需要が殺到し、使用の結果性能が認められ、同社は大きく発展しました。併せて菊地は宣伝のために雑誌を発行する案を示し、1924年に『フォトタイムス』を創刊しました。

1925年10月から1926年12月にかけて、菊地は事業拡張の可能性を探る海外調査に出ました。帰国後に講演録『欧米写真工業界の概況』(フォトタイムス社・1927年)が発行されています。この視察の成果として、コダックが利益の一部を写真界に還元することで発展を促していることに範を取り、技術者の養成を行う教育機関として1929年に「オリエンタル写真学校」を設置しています。また同年『写真採光法』(フォトタイムス社)を著しました。《『スタジオ フォト マニュアル 5』(写真工業出版社・1984年)に一部再録》

菊地の生涯については、『菊地東陽伝』(菊地東陽先生伝記編纂会・1941年)のほか、『オリエンタル写真工業株式会社三十年史』(1950年)『オリエンタル写真工業株式会社70年史』(1989年)の両社史に詳しく記されています。



『オリエンタル写真工業株式会社70年史』